

## こころの永久革命

外間正四郎\*

### A Need for Eternal Spiritual Revolution

Seishiro HOKAMA\*

沖縄はことし復帰10周年を迎えた。交通の面がらいうと復帰前は“人間社会”であった。復帰後は“車社会”になった。復帰前は歩行者が横断歩道に一步でも足を踏み入れると、車はピタッと止まった。長い間のアメリカ統治の影響で歩行者優先が徹底し、それが習慣になっていたのである。復帰後は、狭い島ににわかに各種の色とりどりの道路標識がそれこそ林立した、おじいさん、おばあさん、子供たちには分からないのも道理、その多くは車のための標識だからである。かくて“車社会”の到来となった。小さな社会変革であった。

復帰後6年経って大きな社会変革を迎えた。それまで慣れ親しんできた「人は左、車は右」の交通方法に、昭和53年7月30日午前6時を期して別れを告げたのである。一口に「右から左に変わるだけではないか」といわれるが、人間の長い間の習慣というのはそう簡単に直せるものではない。第一、車は頭で運転するのではなく、無意識に条件反射的に身体で運転するものである。7・30（ナナサンマル）のため道路の曲り角の“隅切り”工事が行われ、運転者を集めての講習会が開かれ、小学校では道路横断訓練が行われ、マスコミは「いのちを守ろう」のキャンペーンをした。それでも田舎の視界のきかない曲り道でトラックの横転事故があった。ハンドルを切りながら運転手は「右はどこだ！」と叫んだ。幸い死亡事故ではなかった。

しかし、事故らしい事故はこれ位のものであった。“車社会”になってから、その社会の秩序を全面的に変更するということは一種の社会革命である。しかも車は“走る凶器”とも呼ばれている。死亡事故が出てもある程度やむを得ない。だが、事実は死亡事故ゼロが32日間も続いたのである。発生件数、負傷者数とも大幅に減少した。「ナナサンマル」を契機に沖縄県警察本部が目標に掲げた「日本一交通安全な県へ」は、ここに達成されたのである。

だが、初心は忘れるためにあるらしい。「車は左社会」が定着し、人心がそれに慣れてくると、事故がまた頭をもたげる。

沖縄は離島県である。周囲を海に囲まれた県は沖縄だけである。これがさらに沖縄群島、宮古群島、八重山群島からなる。この離島性は何を意味するか。他府県みたいに通過交通がないということである。もちろんフェリーの就航（復帰後）によって、県外のプレートも見かけることはあるが、それもたまにといった程度である。通過交通の多い地域では、運転者が地理不案内だから運転も慎重になる。地元運転者への波及効果も出てくる。それが無いということは、“なれあいの社会”になってしまうということである。そこに交通三悪の育つ余地が出てくる。

沖縄には汽車や電車がない。唯一の大量輸送機関は民営のバスである。鉄軌道のない日本唯一の“車社会”である。それだけバス、乗用車、トラック、二輪車による事故発生の余地が広がっているといえる。沖縄は“夜型社会”である。日の入りが東京に比べ1時間ほど遅いせいもあるかもしれない。宵っばりはまた飲酒運転、スピード違反、そして、暴走族のちょうりょうを許すもとなる。かくて7・30で日本一交通安全になった県も交通革命が成就し、民心が落ち着くとまたぞろ元の黙阿弥に戻った。沖縄県警察交通課の入口には、肉太で「暴走族対策本部」の看板が掲げられている。真の交通安全対策は精神の問題である。“こころの永久革命”が必要だ。

\* 琉球新報社論説委員長 Chief Editorial Writer, Ryukyu Shimpō Newspaper  
原稿受理 昭和57年7月1日